

月刊誌
健全な言葉
の
一問答室抜粋集一



松長 宏 [編]
Matsunaga Hiroshi

月刊誌
健全な言葉
の
一問答室抜粋集一



松長 宏 [編]
Matsunaga Hiroshi

「健全な言葉」

の

問答室抜粋集

(105号～188号)

序 文

現在皆様方が目にされている月刊誌「みことば」の前身である「健全な言葉」は、昭和26年9月から昭和42年4月まで発行されていました。このうち、105号から188号に掲載されていた問答室（読者からの質問に解答されていたもの）を抜粋し、取りまとめました。

当時の時代背景は現在と異なりますが、ほぼ原文のまま掲載しています。聖書を理解することが難しいときの参考となり、より知識が深められ、充実した信仰生活を送る助けとなることを願っています。

2026年4月

砺波にあるキリストの集会
松長 宏

105号（昭和35年＝1960年5月）

【問い】

「女たちも遠くから見ていたが、その中には、マグダラのマリアと、小ヤコブとヨセの母マリアと、サロメがいた」（マルコ15：40）の中の「小ヤコブ」という人について説明してください。

【答え】

このヤコブが「小ヤコブ」と呼ばれているのは、この箇所だけです。年齢（あるいは身長）が低かったので「小（ヤコブ）」と呼ばれているのですが、「ゼベダイの子ヤコブ」（マルコ1：19）と比較しているではありません。ゼベダイの子ヤコブは、マルコの福音書が書かれたときには、すでに殉教していました。一方、主の兄弟ヤコブは、「使徒の働き」の時代にエルサレムの集会で目立った存在であり、「ヤコブの手紙」の著者でもあったので、このヤコブと区別するためでした。「小ヤコブ」の母の名は「マリア」でしたが、これは主の母マリアのことではありません。「小ヤコブ」は有名でしたから、「小ヤコブ…の母マリア」と書くことによって主の母マリアと区別したのです。彼女は「クロパの妻マリア」（ヨハネ19：25）と同一人物だと考えられています（このマリアは、主イエスの母マリアの義理の姉妹だという説もあります）。マタイの福音書27章56節に出てくる「ヤコブ…の母マリア」と、マルコの福音書15章40節のヤコブの母マリアは同一人物です。そして、「クロパ」（クレオパ）は「アルパヨ」（マタイ10：3、マルコ3：18）と同一人物だと信じられています。これらのことから、「小ヤコブ」は、12使徒の一人である「アルパヨの子ヤコブ」に違いありません。

106号（昭和35年＝1960年6月）

【問い】

ヨセフは主イエスの本当の父ではなかったのに、なぜマタイの福音書

にヨセフの系図が載せてあるのでしょうか。

【答え】

ご存じのとおり、福音書には、イエス・キリストの系図が2つ記録されています。マタイの福音書1章のほうは王としての系図で、アブラハムで始まり、ダビデとユダの王たちを経て、ヨセフまでたどっています。ヨセフは主イエスの戸籍上の父ですが、本当の父ではありません。一方、ルカの福音書3章のほうは血統による系図で、マリアの父エリからダビデ王家の分家を経て、アダムまでさかのぼっています。23節に「ヨセフの子と考えられていた」と記されているように、キリストは、人々の考え、すなわち戸籍上はヨセフの子と呼ばれたので、ヨセフからダビデまでの父系の公式系図が必要なのです。同時に、母系の公式系図も必要です。それは、主イエスを「ダビデの子」と呼ぶことを否定する者たちを黙らせるためです。そのため、マタイの福音書ではヨセフが強調され、ルカの福音書ではマリアが強調されています。そして、系図ばかりか物語全体が、マタイの福音書はユダヤ人の観点から、ルカの福音書は異邦人の観点から書かれているのです。

107号（昭和35年＝1960年7月）

【問い】

第2コリント5章1節に「たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています」と書いてあります。この「人の手によらない永遠の住まい」とは、どういう意味でしょうか。

【答え】

「天国のことだ」と答える人がいるかもしれませんが、それは間違いです。この「人の手によらない永遠の住まい」は、やがて、すべての信者が受け取ることになる、栄光のからだのことです。

すでに死んだクリスチャンは、主が再び来られるまで「裸の状態」（同

3節)に置かれています。すなわち、からだは墓に入り、たましいは神のみもとへ行きましたが、この「裸の状態」は永遠に続くものではありません。主イエスが再び来られると、すでに死んだ信者はみな、栄光のからだでよみがえります。一方、まだ生き残っている信者は、みな変えられて、この「栄光のからだ」を受け取ります。ですから、パウロは次のように言っているのです。「私は、死によって『裸』になりたくない。主が再び来られるときまで、地上に生き残りたい。けれども、死んでも死ななくても、この『永遠の住まい』が私のために備えられた。ご再臨のとき、この死ぬべきものが、いのちにのまれてしまうのだ」。何と幸いな希望でしょうか。

108号(昭和35年＝1960年8月)

【問い】

「長老」と「監督」は、どう違いますか(使徒14:23とIテモテ3:1を参照)。

【答え】

使徒の働き14章23節で「長老」と呼ばれ、第1テモテ3章1節で「監督」と呼ばれている人物の間には、何の違いもありません。どちらも、神の集会の中で同じ立場にあり、同じ働きに対して同じ責任を負っています。長老の仕事は、第1ペテロ5章1～3節に明記されています。そこでは、神の羊の群れを「牧する」(または「番をする」)ことが命じられています。監督する一方で、その群れの模範ともなるべきです。若い人たちは長老に従わなければなりません。同じように、使徒の働き20章28節では、同じ責任を負う複数の監督者が立てられています。彼らも聖霊によって監督者とされたのです。

使徒でもなく、使徒の代理人でもない、たとえばテモテやテトスのような人が長老(監督)を任命するようなことは、今の時代ではありません。けれども、聖霊は今も長老(監督)をお立てになり、その人をこの仕事にかなうようにされます。聖書は、私たちがそういう人たちを認め、

その働きのために特に尊敬し（Ⅰテサロニケ 5：12、13）、彼らに従うように（ヘブル 13：17）勧告しています。

長老は特別な服装をしているわけではありませんが、矛盾のない生活と、聖徒の幸福と繁栄を願う深い思いや気遣いがあれば、この働きに対して十分な資格を有していると言えるでしょう。長老は、救われたばかりの人ではなく、よく経験を積んだ人で、キリストにある群れを守り導くことができなければなりません。

109号（昭和35年＝1960年9月）

【問い】

救われていない人が死んだら、その人のたましいは、どこへ行くのでしょうか。

【答え】

この問題はルカの福音書 16章 19～31節で扱われていますが、それが「たとえ話」だとは、聖書のどこにも書かれていません。ラザロも、「ある金持ち」も、そしてアブラハムも、みな実在する人物でした。主は、その話によって、救われなかった人の死後の状態を示されたのです。この金持ちのたましいは「よみ」に行きました。「よみ」は、ギリシャ語の「ハデス」、ヘブル語の「シェオル」に当たります。よみは、古代のギリシャ人やローマ人が信じていたのと同じように、旧約時代には2つの部分に分かれていて、その間に、決して越えられない淵がありました。「アブラハムの懷」、すなわち「パラダイス」と呼ばれる所が上のほうにあり、これが義人の行く所でしたが、低いほうは、失われたたましいが行く所でした。今日でも、わかるのはこれだけで、聖書は、これ以上のことは教えていません。失われたたましいは「よみ」でも生きていて、自分が置かれている立場や状態を自覚しています。そして、記憶も感覚も持っていて、苦しみもだえているのです。今の天が滅び、この時代が過ぎ去るまで、彼らはこの状態に置かれていますが、最終的には、さばきのためによみがえり、復活のからだで主の御前に引き出されて、永遠に火の

池に投げ込まれます。不信者がよみがえったときのからだがどのようなものなのか、その性質については何も啓示されていません。第1コリント15章に示されているのは、よみがえった信者のからだのことです。「死者のために祈ること」や「死者に対して祈ること」を信じて実際に祈っている人が、たまたまルカの福音書の16章を読んだら、どう思うでしょうか。聖書は、「死者が生者に対して祈ること」も「生者が死者に対して祈ること」も、どちらも無益であると教えています。このように、聖書もキリストの復活も信じたくない人は永遠に滅びることになるのです。

110号（昭和35年＝1960年10月）

【問い】

長老には、どういう資格が必要でしょうか。また、どのように承認されるのでしょうか。

【答え】

聖書の教えのとおりに設立された集会には必ず長老（監督）が立てられる、と新約聖書は教えています（使徒11:30、14:23、15:2、4、6、16:4、20:17、28）。使徒の働き20章28節は特に重要です。「教会（集会）」の中に、神に召されて長老が立てられました。それは、人によるものではなく、聖霊によるものでした。長老の資格は第1テモテ3章1～7節に明示されています。原語のギリシャ語は、監督の「職」には何も言及していません。長老は「職」ではなく、その「働き」を望むべきなのです。

長老の働きは、「神の教会（集会）を世話すること」（1テモテ3:5）と、「よく指導して」、「みことばと教えのために労苦」することです（同5:17）。私たちは、長老たちを模範として、彼らの信仰に倣わなければなりません（ヘブル13:7）。長老たちの「言うことを聞き、また服従しなさい」（同17節）と記されています。そして、彼らを尊敬しなければなりません（1テモテ5:17）。